

研究

中島子玉著「日本詠史新楽府」(五)

解説・挿絵 佐藤 巧

(会員 佐伯市池船町)

編集・校正 鶴野博文

(会員 佐伯市田の浦町)

(十三) 葬髪(髪を葬る) (鎌倉三代將軍実朝、甥の公暁に

暗殺され源氏絶ゆ)



(楽府詩)

(読み下し文)

擊公袂臣眼有涙往不吉

公(実朝)の袂を撃り臣の眼に
涙有り往くこと不吉なりと。

失公頭臣眼無涙涙唯血

公の頭失われ臣(広元)の眼涙
無く涙するは唯血のみ。

外家手握兵馬権

外家の手、兵馬の権を握り、

源氏不絶纒如髪

源氏の絶えざること纒に髪の如し

今日把髪代頭葬

今日髪を把り、頭に代えて葬る。

源氏之統與髪絶

源氏の(血)統、髪と與に絶ゆ

(語注)

・公||鎌倉三代將軍源実朝、二代頼家(同腹の兄)、伊豆

修善寺に幽閉、殺された後を継ぐ。時に十二歳、外

戚として北条時政これを保護、実権を振う。

・広元||大江広元、もと朝廷の下級官吏

才能があつても家柄によつて出世の限界が定まっ

ている京都の官吏集団から、頼朝の新未来政権の

基礎創りに飛び込み、頼朝第一の側近となる。「知

恵袋」とよばれ、性冷徹、成人後、一度も涙したこ

とがないという。

・外家Ⅱ北条家（時政・政子・義時等）

（大意）

「二二九年（承久元年）正月二十七日戌の刻（夜八時）を卜し、源実朝公、右大臣の拜賀式に出でんとす。

大江広元、進んで謁して曰く、「（以上日本外史より）公の袂をとつてゆすり、これまで一度も泣いた事がないという眼に涙を湛え、「なにか不吉な胸騒ぎがします。行つてはなりません。」と強く諫めた。

はたして実朝は、十九歳の甥に討たれ、首は持ち去られた。激しい怒りと後悔、ただ激して血の涙が出る思い。兵馬の権はすでに北条氏に握られ、源氏は辛うじて一本の髪のように絶えないでいるだけなのに、今日は首の代わりに遺髪をとつて葬らなければならなかった。

これで源氏の血統は、髪とともに絶えてしまった。

（子玉の漢文注釈文の読み下しⅡ楽府詩の解説）

北条氏、頼家の遺子、公暁を召し、京師より至らしめ用いて鶴岡の別当に補す。

公暁、つねに父（頼家）の幽死を憤り、実朝の為す所と謂い、窃かに報復を謀る。

承久元年正月二十七日、実朝まさに鶴岡の祠に拜賀せんとす。

大江広元、進みて謁して曰く、

「臣、平生未だ嘗て涙出でざるに、今、故無くして泣然たり、臣、危惧す。君、先の大將軍（頼朝）の東大寺に落せる例に倣うべし。衷甲し、自ら備えよ」と。

実朝、可かずして、出ずるに臨みて、秦公氏に髪を梳らしめ、髪一縷を抜きて之を与えるに嗤いて曰く「わが遺物なり」と。

已に洞門（鶴岡八幡宮）に入る。儀畢り階（段）を降る。公暁、階側自ら躍り出て、刀を揮いて実朝を切り、其の首を持ちて逃れ去る。

明くる日、実朝を葬るに首を得ず、遺す所の一髪を以て之に代う。源氏の正統是にて絶ゆ。公暁、後に長尾定景の斬る所と為る。

此により、北条時政、外舅を以て権を執る。頼家の幽（閉）、実朝の弑（逆）、皆其の謀より出ずと云う。

（語注）

・京師Ⅱ京都。公暁は京都で仏道修業をしていた。

・別当＝長官、または大きな寺などの事務長等。

・幽死＝公暁の父、二代將軍頼家、伊豆の修善寺に幽閉

され、北条氏に殺害された。

・東大寺に落す＝源平戦で被害を受けた東大寺の修復に

頼朝大いに援助し、その落慶供養に招かれた。

・衷甲＝此の時、礼服の内側によろいを着ること。

・弦然＝涙がはらはらと落ちるさま。

(注釈文の解説)

この事件は、日本史上かなり有名で周知されており、子玉の注釈文も一読してご理解いただけると思う。

ところが、事件の背後関係はかなり複雑で全てを述べるとには限りがあるが、子玉の楽府詩の鑑賞に必要な史実(子玉や頼山陽の時代に理解されていた史実)は知らなければならぬ。

先ず、この事件の大きな伏線には、頼家、実朝、公暁、三人の乳母の家が深く絡んでいる。

【比企能員】妻が頼家の乳母、頼朝の流人時代、全面的に親身に応援したあの「比企の尼」の女婿。頼朝の信頼は

抜群、強力な側近、二代將軍の後ろ楯、しかも娘、若狭は頼家の愛妾で一幡(男子)を産み、外戚として北条家を凌ぐことは、ほぼ確定的だった。

【阿波の局】頼家の弟、千幡(実朝)の乳母で時政の娘、政子の妹、夫は頼朝の弟で唯一人生を残っていた阿野全成(一二〇三年＝建仁三年、頼家幽閉前に殺される)しかし、これだけの条件では千幡の次期將軍は程遠い希望でしかなかった。

ところが、この二大乳母家勢力が悲劇的大逆転をする。弱冠十八歳の頼家はまれに見る武芸の達人でもあり、父以上の独裁権を目指し宿老を無視、比企関係の若手人物を主として独自の近臣集団を構成、関東武士団の生命である土地問題では前例を無視、蹴鞠に熱中、さらに安達景盛の愛妾を奪うなど、坊ちゃん將軍の欠点がついに比企家を滅ぼし、愛妾若狭と頼家の跡継ぎ一幡も殺され、北条家の飛躍と政権交代の好機となる。

一一九九年＝正治元年、頼朝の死から五年間、これまでに至る背景には、さらに多くの述べきれない背景と疑問が残り、詳述は略すが結果として、一二〇三年九月、実朝三代將軍擁立の翌年七月、頼家は北条に殺害さ

れる。実朝の主題に係わる第三の乳母の家は、

【三浦義村】妻が頼家の遺児公暁（幼名ニ善哉）の乳母。

地元鎌倉（三浦半島）の大豪族、公暁を手なづけ鶴岡八幡宮で実朝と北条義時を同時に殺す計画だったが実朝の太刀持ちの役だった義時が直前に病と偽り、交代した源仲章が殺された。義時は闇にまぎれ急遽帰宅、戦いに備えた。

その後、公暁も同じく闇の中を走り三浦に連絡をとる。義時を打ちもらしたことを知った三浦義村は、直ちに裏切りを決断、公暁には迎えの者をやるので待てと伝え、その間に義時に密告、逆に公暁を討たせたといいう。

これを称して「二重暗殺事件」とも言われ、日本史上では源氏・北条政権交代を決定つけた大事件である。

（編集メモ）

①公暁が「吾は公暁なり、父の仇を報ず」（日本外史）と宣言した時点、真の親の仇、義時も仕留めたという公暁の確信ゆえの宣言で、実朝は頼家暗殺時十二歳で、文化

人的人柄を公暁は知っていた筈だが、義時と実朝の同時殺害後の公暁四代將軍実現の先取り宣言ではないか、三浦氏はそれを支える大勢力を持っていた。

②鶴岡八幡宮の拝賀式についての大江広元の忠告には式を夜ではなく昼にしたらというのがあったが、源仲章が答えて、「式は燭（松明）をとって行うのが故事（昔からのしきたり）である。」といい、また「大臣、大将は甲（よろい）を衷す可らず」と言って受け入れなかった。（日本外史より）

ただし、多くの史書では、頼家は弟の実朝に討たれたと書かれているのは、やや不満である。

③以然に紹介した「日本詠史集詳解」（声教社同人発行）は頼山陽をはじめ、子玉に関係の深い廣瀬淡窓、旭莊、佐伯の秋月橋門など、主として関西有名漢学者の詠史が約二百首以上もあり、本誌にもたびたび引用しているが中島子玉の作品は載っていない。

これは子玉がこれらの文人たちと深い交際があり、かれが山陽のもとで発行した「日本詠史新楽府」が周知されていたので子玉作品は敢えて掲載しなかった、と

推察される。しかし、この「詠史集」のなかでは、実朝暗殺事件は誰も採り上げていないので、子玉独自の史観が想像されるところである。

(十四) 妖靈星 (天子叛を作す)



(楽府詩)

天王寺妖靈星

天狗空中語如人

君莫索狗君即狗

狗被主飼噬主手

(読み下し文)

天王寺の妖靈星

天狗空中に語ることに人の如し

君狗を索る莫れ、君即ち狗なり。

狗は主に飼われ主の手を噬む。

六師一移指為叛 六師一たび移指せば叛(軍)と為る
君臣之義亦何有 君臣の義また何ぞ有らん。
君不見二十有二史 君見ずや二十有二史を
何史嘗書叛天子 何ぞ史嘗て天子に叛くを書さざらん

(語注)

- ・妖靈星 世の中に不吉なことが起こる前兆としてあらわれる妖しい星。(太平記)
- ・狗 北条九代執権、高時が闘犬に惑溺、政治を怠る。
- ・六師 六軍・中国周代の天子の軍、一軍は一万二千五百人、総計七万五千人だがここでは天皇の官軍。
- ・移指 命令書を回覧させる。(まわしおみ)
- ・君不見 君見ずや、見るがいい、命令に近い言い方。

(大意)

天王寺に納められている聖徳太子の預言書に書かれていると言う妖靈星があらわれ、高時に「お前は狗を求めめる必要はない。自分自身、もう狗に成り下がっているではないか。(もつと政治に励め)

一方、徳を以て天下を納めるのが天子(天皇)の道であ

るべきなのに、白河帝の院政開設以来、朝廷の内紛による政治放棄、無責任によれば、一たび命令書が廻れば、直ちに賊軍（叛乱軍）となる。

これに反し、北条氏は政権を安定させてからは、おおむね臣下の道に沿って、將軍は部外から迎え、官位は四位以上を望まず、元寇も何とか処理してきたが、九代高時が臣下の道を誤り、北条氏を滅亡させてしまった。

君主は「天の徳」、臣下は「地の道」を守ることが「君臣の義」というものであった。（太平記より）

ここに前に紹介した「日本詠史集」から北条氏の良い治世者と見做されている北条時頼を、廣瀬旭莊（廣瀬淡窓の弟）が詠じた二首を参考に挙げる。（読み下し）

北条時頼 佐野某の繡像に題す二首

(一)

儉以て身を率ゆ祖訓に由る。児、能く虜を鑿にす。

孫謀を見る。何ぞ須いん八史民病を問うを。飛錫親しく

巡る六十州。

(大意)

儉約を自ら実践するのは、祖先の教えに依るものである。子の時宗、子孫を慮り、元寇の敵をよく全滅させた。出家して民情を見たいが、中国故事にある多くの官吏を調査に派遣する必要はない。錫杖一本で全国を巡ろう。

(二)

大雪檐を圧して檐勢危うし。炬紅一点消えんと欲する時薪なし。何を以つて佳客を留めん。盆梅を剪り尽くして自ら知らず。

(大意)

時頼が行脚中ある田舎の家に一夜の宿を乞う。

たまたま大雪で檐は重みで折れんばかりだった。

主人、佐野経世は、この旅の僧をもてなす薪がないので大事な盆栽の梅を切ったが気にもしなかった。これは能の「鉢の木」でも有名（内容省略）。

(注釈文の読み下し)

北条高時、狗を闘わすを好み、常に以つて楽しみな

す。遍く天下に獒犬を献せしむ。諸州之を興し、争いて進ず。四五千匹に及び、飼うに魚鳥を以つてし、着するに錦繡を以つてす。

税を倍して費えに充つ。民人大いに苦しめらる。

高時、嘗て宴するに天狗数十頭、歌舞して曰く「天王寺の妖霊星」と。

識者、以為らく、北条氏亡ぶの兆しならんと。

後醍醐帝、北条氏を除かんと欲する時、「天皇謀叛」の語あり。

(語注)

・獒犬コウケン＝強い犬

・興コト＝興に乗せる

・錦繡キンシュウ＝錦と刺繡を施した織物

(大意)

九代の執権、北条高時、始めは田楽テンガクに夢中になり、京都から役者をまねいて、有力御家人に世話させ、華やかな舞台で芸を競わせた。

次に同じようなやり方で闘犬にのめりこむ。

全国から猛犬を探し出させて、預けて飼育させるのだが、ついに五千匹ほどにもなり、魚鳥を食わせ、錦繡を着せて、徳川綱吉のやったよりひどいお犬様あつかいをさせたので莫大な費用がかかり、税を倍してその費用に充てなければ足りず、人民は大いに苦しめられた。

嘗て、高時が宴会を催し泥酔、まわりに人はいなくて、数十頭の天狗が高時とともに、舞い踊りながら、「天王寺の妖霊星」と、繰り返し囃してていた。

高時は意識なく、沢山の獣の足跡だけが残っていた。識者は、これらを北条氏の亡びる前兆だと思った。

後醍醐天皇はこれ等を見て、北条氏討伐を行わんと決心した時、「天皇謀叛」と言われたものである。

(編集メモ)

この「妖霊星」のキーワードは、「君臣の義」と「天皇謀叛」で、他の楽府詩とやや異なり、国家の体制や政治論に踏み込んでいるのが特徴ではないだろうか。

「日本外史」で頼山陽も北条氏の冒頭で、これにふれているが、「日本詠史集」では誰も取り上げてはいない。ただ子玉だけが、関心を持って創作したものと推察する。

「日本外史」が幕末の志士たちのバイブルとしておおいに読まれたというのは、単なる叙事詩ではなく、外史氏曰く「………という書き出しで、筆者山陽の意見を織り込んでいるからであろう。

とくに「承久の乱」後や「南北朝」の頃に「天皇謀叛」という語が、しばしば使用されたと、昭和四十年発行「日本の歴史・鎌倉」（中央公論社）の中にも、

『天皇御謀叛』ということばが、鎌倉時代末から南北朝時代にかけて、しばしば用いられた。（中略）

律令制国家では「謀叛」は、天皇に対する反逆だから、天皇御謀叛といういい方はあり得ない。

にもかかわらず、そこに大きな歴史の変動があり、「天皇」はもはや唯一絶対の支配者ではなく【幕府】こそこの国の真の支配者・実力者でそれに対する反抗こそが「謀叛」の名に値するものと変わったので、承久の変（一二二一年）が、その契機となった。』と書かれている。

（途中省略引用）

以上、実朝暗殺事件が、日本の国家体制に大きく影響を与えたこと、また中島子玉がこれに関心をもつて楽府詩を創作したことに注目したい。